

「弟の笑顔が教えてくれたこと」

一宮市立西成東部中学校

2年 大野 未愛さん



私の弟は知的障害のダウン症を持っています。弟の見た目は、少しつり目で、目と目の間隔が広く、普通の人とは少し異なっています。また言語の理解が遅いなど、発達のスピードがとてゆつくりです。

ある日、弟と家族でお出かけに行きました。弟は大好きな本屋を見て、笑顔で走っていました。私が弟を追いかけたとき、近くにいた小学五年生くらいの男の子とお母さんの声が聞こえてきました。「ねえ、あの子変だね、かわいそう。」その言葉を聞いた瞬間、私は心の中がざわつきました。弟は言葉を理解する力があまりなかったので、何もなかったようにニコニコしていました。私の心にその言葉が深く刺さりました。弟は何も悪くない。ただ自分らしく楽しんでいただけなのに。なぜ「変だね。かわいそう。」と言われなければならないのか悔しくて悲しくて、その親子に何も伝えられなかった自分にも腹が立っていました。弟のことをそんなふうに見ていた人がいたと思うと、胸が、今にもはち切れそうなくらい悔しくなりました。学校へ登校しても、私はずっとその言葉が頭から離れません。どうしてそんなふうに言われるんだろう。先生に話すと、少し驚いた表情をして、静かに言いました。「昔から、そういう目で見える人はいたよ。でも、悪気があるって言うとは限らないと思う。知らないから、そう思ってしまう人もいるんだよ。」その言葉を聞いて、私は少し冷静になりました。確かに、私も弟と暮らしていません。障害についてちゃんと考えたことがあったかどうかわかりません。「知らない」ということが悪気のない言葉で簡単に人を傷つけてしまうこともある。そう気づくことができました。

その後、学校で福祉実践教室があり、車いす体験や、聴覚障害について学ぶことができました。動けない、聞こえない、ということだけでこんなにも不便なんだと知ることができ、とても良い経験ができました。同時に、弟も日々また違った不便や困難と闘っているのだと、改めて気づきました。少しだけ、弟の気持ちに近づけた気がしました。弟は、言葉でうま



く伝えられない分、表情やしぐさで気持ちを伝えてくれます。笑っていると、うれしいことがわかるし、表情が暗いと怒っていることがわかります。私が落ち込んでいると、一緒に遊んでくれることもあります。そんな弟の存在に、私は数えきれないほど救われてきました。私は、弟がいることで、思いやりについて深く学びました。そして、自分と違う人の気持ちを考えることの大切さを知りました。弟は「できないこと」よりも「できること」がたくさんあります。人を笑顔にする力、その場を明るくする力、それは誰もができるとは限らない弟だけのすごい力だと思っています。だから私は、誰かがまた「かわいそう」など言ってきたときには、「弟は、かわいそうなんかじゃない。すばらしい心を持った、自慢の弟です。」とはっきり伝えたいと思います。そしてその言葉が、少しでもその人の心に届いてくれたらいいなと思います。また少しでも多くの人に障害について知ってもらうために恐れず、弟のことや福祉実践教室で学んだことを伝えていきたいと思いました。

この出来事を通して私は、「違い」は決して悪いことではないと改めて気づきました。そして、「違い」を知り、認め合うことが福祉にとって大切な一つだと思っています。弟は私にとって世界でいちばん大切な存在です。弟と過ごす日々の中で、私は多くのことを学び、優しさや思いやりの気持ちを考える力を教えてもらいました。もし、弟がいなければ、私はこんなふうになんか人に寄り添おうとは思えなかったかもしれませぬ。弟が私の人生にいてくれること、それは私にとって、大切な大切な宝物です。これからも、弟と一緒に笑って、泣いて、手を取り合って生きていきたいと強く思いました。いつか弟が困っているときには、誰かがそっと手を差し伸べてくれる、そんな優しい社会になってほしいと心から願っています。私も誰かの力になり、たくさんの人々を救うことができるように成長していきたいと思えます。私は最高の弟と過ごすことができないこの時間を、これからも大切に生きていきたいと感じました。

